

## 1-8 ドイツ文学

### 研究・教育活動の概要と特色

ドイツ文学専攻分野（以下、本研究室）は、1924年（大正13年）の設立以来、堅実な文献学的手法によるドイツ文学研究を研究・教育の基本として発展してきた。研究対象としては伝統的にゲーテやロマン派が中心であったが、初代教授小宮豊隆以来の比較文学的研究や、戦時中在職したカール・レーヴィットの影響を受け継ぐ思想系の研究などにも特色がある。現在のスタッフのうち、哲学出身の森本は、言語や芸術をめぐる理論的な研究を専門とする。05年度着任の嶋崎は、先端的な言語学的手法を取り込んだドイツ語学の研究者であると同時に、中世以来のドイツ語史にも詳しい。また外国人教員（教授）のシュミッツは、トーマス・マンやゲーテの研究者として、ドイツ文学の研究・教育を支えている。なお2008年在職中に病没した前教授原研二とシュミッツは、ブルクハルト財団により編集が進められているブルクハルト全集の『イタリア・ルネサンスの文化』の巻の歴史校訂版編集に携わった。

教育面においては、まずドイツ語力、特に文学的なテキストを正確に読む力の養成を主眼としている。伝統的な目標であるが、人文学研究のスキルとエトスを学ぶためには不可欠の要素であり、学生の多くもこの方針に満足している。同時に近年は、外国人教員を中心としたコミュニケーション能力の訓練に力を入れるとともに、学生の様々なニーズに応えるべく、スタッフの専門領域の幅広さを活かした授業内容の多様化に努めている。

本研究室のスタッフは、全学教育（一般教育）科目「ドイツ語」を担当するとともに、研究上ドイツ語を必要とする学部生のために共通科目「専門ドイツ語」の授業を提供するなど、専門分野教育以外でのドイツ語教育にも尽力している。また「ドイツ語科」教職課程認定への対応として、中学・高校の教員免許状取得に必要な授業科目を開講し、研究科および大学の入試関連諸業務等においても、ドイツ語の専門家としての立場から貢献している。

### I 組織

#### 1 教員数（2011年9月末現在）

教授：2

准教授：1

講師：0

助教：1

教授：森本浩一，ブリギッテ・シュミッツ

准教授：嶋崎啓

助教：川村和宏

## 2 在学生数（2011年9月末現在）

学部 (2年次以上)	学部 研究生	大学院博士 前期	大学院博士 後期	大学院 研究生
21	0	3	1	0

## 3 修了生・卒業生数（2007～2011年度）

年度	学部卒業生	大学院博士課程 前期修了者	大学院博士課程 後期修了者 (含満期退学者)
07	6	2	0
08	6	1	0
09	8	3	3
10	9	3	1
11	0	0	0
計	29	9	4

\* 2011年度は、9月末までの数字

## 過去5年間の組織としての研究・教育活動（2007～2011年度）

### 1 博士学位授与

#### 1-1 課程博士・論文博士授与件数

年度	課程博士授与件数	論文博士授与件数	計
07	0	0	0
08	1	0	1
09	2	0	2
10	1	0	1
11	0	0	0
計	4	0	4

\* 2011年度は、9月末までの数字

## 1- 2 博士論文提出者氏名、年度、題目、審査委員

竹内拓史，2008 年度，『ゲオルク・ビューヒナーの自然科学研究と文学 宿命論的世界観を媒介として』

審査委員：教授・森本浩一（主査），教授・原英一，准教授・嶋崎啓，教授・シュミッツ ブリギッテ

渡辺美奈子，2009 年度，『ヴィルヘルム・ミュラーの詩作と生涯 『冬の旅』を中心に』

審査委員：教授・森本浩一（主査），教授・阿部宏，准教授・嶋崎啓，教授・シュミッツ ブリギッテ

川村和宏，2009 年度，『エンデの貨幣観と錬金術思想の系譜 未公開資料と後期作品に基づく考察』

審査委員：教授・森本浩一（主査），教授・大河内昌，准教授・嶋崎啓，教授・シュミッツ ブリギッテ

橋本由紀子，2010 年度，『ゲーテとバロック文学 『ファウスト』における「夾雑」的場面の分析』

審査委員：教授・森本浩一（主査），教授・大河内昌，准教授・嶋崎啓，教授・シュミッツ ブリギッテ

## 2 大学院生等による論文発表

### 2- 1 論文数

年度	審査制学術誌 (学会誌等)	非審査制誌 (紀要等)	論文集 (単行本)	その他	計
07	0	0	0	1	1
08	3	1	0	3	7
09	1	0	0	0	1
10	0	0	0	2	2
11	1	0	0	0	1
計	5	1	0	6	12

\* 2011 年度は 9 月末までの数字。ただし、以後の掲載が決定しているものも含む。

### 2- 2 口頭発表数

年度	国際学会	国内学会	研究会	その他	計
07	0	3	8	0	11
08	0	3	9	1	13
09	0	2	9	0	11

10	0	0	6	0	6
11	0	0	4	0	4
計	0	8	36	1	45

\* 2011年度は9月末までの数字。ただし、以後の発表が決定しているものも含む。

## 2-3 上記の大学院生等による論文・口頭発表の中の主要業績

### (1) 論文

川村和宏「書簡から見るエンデと貨幣論 『鏡の中の鏡』第四話執筆とゲゼルの利子論」, 『東北ドイツ文学研究』51号, 2008年.

渡辺美奈子「愛のない心とは……韻のない詩のようなもの 『冬の旅』から「おやすみ」の韻律と分析」, 『東北ドイツ文学研究』51号, 2008年.

渡辺美奈子「辻音楽師(ハーディ・ガーディ弾き)」, 国際オルゴール協会日本支部編『自鳴琴』30号, 2008年.

嶋崎順子, 『ジャン・パウル中短編集 II』(翻訳, 恒吉法海・藤瀬久美子との共訳), 九州大学出版会, 2007年.

嶋崎順子「ジャン・パウルにおける比喩の諸相 『見えないロッジ』を中心に」, 『東北ドイツ文学研究』51号, 2008年.

橋本由紀子「異界からの訓言 エンブレムの構造から読むゲーテ『ファウスト第一部』」, 『東北ドイツ文学研究』52号, 2009年.

加美山若菜「ウィーン工房 モノトーンと四角形の小箱」, 『世紀転換期研究 都市・人・文学(文化研究報告第1輯)』, 2009年.

小田嶋大「世紀転換期ドイツ語圏の音楽 ヴァーグナー, マーラー, 第2次ウィーン楽派を中心に」, 『世紀転換期研究 都市・人・文学(文化研究報告第1輯)』, 2009年.

渡邊紀子「救済と絶望と ココシュカ『風の花嫁』をめぐる考察」, 『世紀転換期研究 都市・人・文学(文化研究報告第1輯)』, 2009年.

宮本祥子「ミヒャエル・エンデ『はてしない物語』 作者/読者, 大人/子ども」, 『批評と創作 2010(文化研究報告第2輯)』, 2011年.

宮本祥子「児童文学の領域 拡大・縮小・融解? ——」, 『ナラティブ・メディア研究』3号, 2011年.

### (2) 口頭発表

竹内拓史「天才への憧憬と失望 ビューヒナーとレンツのドラマツルギーにつ

- いて」，第 26 回ドイツ語圏文化研究会，口頭発表，2009 年 6 月 19 日．
- 川村和宏「資料から見るエンデの貨幣論」，日本独文学会春期研究発表会，2007 年 6 月 6 日．
- 川村和宏「書簡から見るエンデと貨幣論 『鏡の中の鏡』執筆とゲゼルの利子論」，東北ドイツ文学会第 50 回研究発表会，2007 年 11 月 10 日．
- 川村和宏「ヨーロッパ文化概論 III（集中講義）」，茨城大学人文学部，2008 年 2 月 11 日～2 月 14 日．
- 川村和宏「ゲーテ『メルヒェン』と『ファウスト』冒頭部の照応について 錬金術としての解釈の可能性と意義」，第 13 回ドイツ語圏文化研究会，2008 年 5 月 9 日．
- 川村和宏「続・書簡から見るエンデと貨幣論 『鼠取り男』におけるエンデの貨幣論と錬金術思想の系譜」，東北ドイツ文学会第 51 回研究発表会，2008 年 11 月 15 日．
- 川村和宏「ミヒャエル・エンデのゲーテ『メルヒェン』受容 シュタイナーによる解釈との関連を中心に」，日本独文学会秋期研究発表会，2009 年 10 月 18 日．
- 川村和宏「『メルヒェン』に敷衍されたファウストの黒い厨」，東北ドイツ文学会第 52 回研究発表会，2009 年 10 月 31 日．
- 野内清香「『ニーベルンゲンの歌』のハゲネに見る異教の残映」，第 2 回ドイツ語圏文化研究会，2007 年 5 月 9 日．
- 野内清香「『ニーベルンゲンの歌』における滅びの運命 ニーベルンゲン財宝と忠臣ハゲネ」，第 14 回ドイツ語圏文化研究会，2008 年 5 月 14 日．渡辺美奈子「時代は芸術を支配する ヴィルヘルム・ミュラーの詩と生涯」，第 4 回ドイツ語圏文化研究会，2007 年 5 月 25 日．
- 渡辺美奈子「ミュラー『冬の旅』における韻律」，第 11 回ドイツ語圏文化研究会，2008 年 1 月 11 日．
- 渡辺美奈子「愛のない心とは何か……韻のない詩のようなもの 『冬の旅』から「おやすみ」の韻律と分析」，ゲーテ自然科学の集い・東京例会（慶応義塾大学三田キャンパス研究室棟），2008 年 4 月 6 日．
- 渡辺美奈子「『冬の旅』における誠実」，東北ドイツ文学会第 51 回研究発表会，2008 年 11 月 15 日．
- 渡辺美奈子「人生の愛と歌 ヴィルヘルム・ミュラーの『冬の旅』」，第 25 回ドイツ語圏文化研究会，2009 年 6 月 5 日．

- 嶋崎順子「ジャン・パウル『陽気なヴッツ先生』におけるメタファーについて」,  
第4回ドイツ語圏文化研究会, 2007年5月25日.
- 嶋崎順子「ジャン・パウルにおけるメタファーの諸相 『見えないロジ』を  
中心に」, 東北ドイツ文学会第50回研究発表会, 2007年11月10日.
- 嶋崎順子「瞬間へのまなざし ジャン・パウルにおける比喩と視覚的表現につい  
て」, 第38回ドイツ語圏文化研究会, 2010年6月11日.
- 嶋崎順子「ジャン・パウルの機知論 『美術入門』第9プログラムについて」,  
第49回ドイツ語圏文化研究会, 2011年6月24日.
- 橋本由紀子「自己点検的構成 ゲーテ『ファウスト第一部』の構成にみるバロ  
ック性」, 第15回ドイツ語圏文化研究会, 2008年5月28日.
- 橋本由紀子「異界からの訓言 J.W.ゲーテ『ファウスト第一部』におけるエンブ  
レムの構造」, 東北ドイツ文学会第51回研究発表会, 2008年11月15日.
- 橋本由紀子「ドイツ・バロック文学について」, 第24回ドイツ語圏文化研究会,  
2009年5月27日.
- 橋本由紀子「バロック後, ゲーテまでの文学観 ゴットシェート, レッシング,  
スイス派, ゲーテにおけるバロック克服の動きをたどる」, 第39回ドイツ語  
圏文化研究会, 2010年6月23日.
- 八田卓也「薔薇十字運動概観」, 第5回ドイツ語圏文化研究会, 2007年6月8日.
- 八田卓也「薔薇十字思想の系譜」, 第16回ドイツ語圏文化研究会, 2008年6月6  
日.
- 中川美雪「『ニーベルンゲンの歌』写本について」, 第5回ドイツ語圏文化研究  
会, 2007年6月8日.
- 一山貴史「『ニーベルンゲンの歌』における人物の描写と実像の矛盾」, 第5回  
ドイツ語圏文化研究会, 2007年6月8日.
- 加美山若菜「80年代ジャーマンメタルの特性と位置づけ Accept を中心に」,  
第17回ドイツ語圏文化研究会, 2008年6月20日.
- 加美山若奈「ドイツロックの展開 クラウトロックから NDH まで」, 第30回  
ドイツ語圏文化研究会, 2009年10月2日.
- 渡邊紀子「E・T・A・ホフマン『自動人形』について」, 第17回ドイツ語圏文  
化研究会, 2008年6月20日.
- 渡邊紀子「人形的人間, 人間的人形: E.T.A.ホフマン『砂男』と人形の文化史」,  
第31回ドイツ語圏文化研究会, 2009年10月9日.
- 小田嶋大「ジークフリートとブリュンヒルデの死の非悲劇性 R.ヴァーグナー

- 『ニーベルングの指輪』終幕部における一解釈とヴァーグナーが志向した芸術作品」, 第 18 回ドイツ語圏文化研究会, 2008 年 6 月 27 日 .
- 小田嶋大「ヴォータンの「意志」の行方 R.ヴァーグナー『ニーベルングの指環』におけるヴォータンとブリュンヒルデの関係を中心に」, 第 30 回ドイツ語圏文化研究会, 2009 年 10 月 2 日 .
- 風岡祐貴「バッハマンと「猶予された時」」, 第 18 回ドイツ語圏文化研究会, 2008 年 6 月 27 日 .
- 風岡祐貴「バッハマンの詩について」, 第 29 回ドイツ語圏文化研究会, 2009 年 7 月 31 日 .
- 田中壽廣「漂泊の詩人ヘルダーリンと松尾芭蕉の比較考察」, 第 35 回ドイツ語圏文化研究会, 2010 年 1 月 15 日 .
- 田中壽廣「ヘルダーリンの自然観と故郷観についての考察」, 第 43 回ドイツ語圏文化研究会, 2010 年 10 月 15 日 .
- 畠理恵子「ドイツにおけるファッションの考察」, 第 35 回ドイツ語圏文化研究会, 2010 年 1 月 15 日 .
- 畠理恵子「現代ドイツにおけるモード意識」, 第 43 回ドイツ語圏文化研究会, 2010 年 10 月 15 日 .
- 阿部愛子「リヒテンベルクと接続法」, 第 40 回ドイツ語圏文化研究会, 2010 年 7 月 9 日 .
- 宮本祥子「児童文学とファンタジーの現在 ラルフ・イーザウ『盗まれた記憶の博物館』から」, 第 40 回ドイツ語圏文化研究会, 2010 年 7 月 9 日 .
- 宮本祥子「児童文学の領域 拡大・縮小・融解?」, 第 13 回ナラティブ・メディア研究会, 2011 年 1 月 26 日 .
- 山口貴文「戦時における集団についての考察」, 第 50 回ドイツ語圏文化研究会, 2011 年 7 月 1 日 .

### 3 大学院生・学部生等の受賞状況

なし

### 4 日本学術振興会研究員採択状況

なし

### 5 留学・留学生受け入れ

### 5- 1 大学院生・学部学生等の留学数

2009 年度 大学院 計 1 名 ボン大学 (ドイツ連邦共和国)

### 5- 2 留学生の受け入れ状況 (学部・大学院)

年度	学部	大学院	計
07	0	0	0
08	0	0	0
09	2	0	2
10	1	1	2
11	0	0	0
計	3	1	4

## 6 社会人大学院生の受け入れ数

年度	前期課程	後期課程	計
07	0	1	1
08	0	1	1
09	2	0	2
10	0	0	0
11	0	0	0
計	2	2	4

## 7 専攻分野出身の研究者・高度職業人

### 7- 1 専攻分野出身の研究者

なし

### 7- 2 専攻分野出身の高度職業人

大学教員 1 名, 高校等教員 2 名, ジャーナリスト 1 名, 出版社 1 名

## 8 客員研究員の受け入れ状況

なし

## 9 外国人研究者の受け入れ状況

Andreas Cesana (マインツ大学), 講演, 2008 年 2 月 27 日.

Hans Esselborn (ケルン大学), 講演, 2008 年 5 月 2 日.



## 10 刊行物

- 『東北ドイツ文学研究』（専門分野の研究誌），1957年より毎年刊行．
- 『ナラティブ・メディア研究』（情報科学研究科との共同刊行による研究誌），2009年より毎年刊行．
- 『文化研究報告』（専門分野の論文集），2009年より不定期刊行．

## 11 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催・事務局等引き受け状況

### 2007年度

- 講演会：副島美由紀氏（小樽商科大学教授），2007年10月26日，開催．
- 学会：東北ドイツ文学会・第50回研究発表会，2007年11月10日，事務局．
- ワークショップ：ナラティブ・メディア研究会第1回ワークショップ，2008年2月9日，開催．
- 講演会：Andreas Cesana（アンドレーアス・チェザーナ，マインツ大学教授），2008年2月27日，開催．

### 2008年度

- 講演会：Hans Esselborn（ハンス・エッセルボルン，ケルン大学教授），5月2日，開催
- 研究会：ナラティブ・メディア研究会第4回研究会，2008年7月11日，開催．
- 学会：東北ドイツ文学会・第51回研究発表会，2008年11月15日，事務局．
- 研究会：ナラティブ・メディア研究会第5回研究会，2008年12月4日，開催．

### 2009年度

- 研究会：ナラティブ・メディア研究会第6回研究会，2009年7月21日，開催．
- 学会：東北ドイツ文学会・第52回研究発表会，2009年10月31日，事務局．
- 研究会：ナラティブ・メディア研究会第7回研究会，2009年10月21日，開催．
- 研究会：ナラティブ・メディア研究会第8回研究会，2009年11月25日，開催．
- 研究会：ナラティブ・メディア研究会第9回研究会，2010年3月8日，開催．
- 講演会：ナラティブ・メディア研究会講演会（佐々木果氏），2010年3月9日，開催．

### 2010年度

- 研究会：ナラティブ・メディア研究会第10回研究会，2010年7月30日，開

催 .

研究会：ナラティブ・メディア研究会第 11 回研究会，2010 年 10 月 14 日，開催 .

講演会：ナラティブ・メディア研究会講演会（ティエリ・グルンステン氏），2010 年 10 月 15 日，開催 .

学会：東北ドイツ文学会・第 53 回研究発表会，2010 年 11 月 6 日，事務局 .

研究会：ナラティブ・メディア研究会第 12 回研究会，2010 年 11 月 16 日，開催 .

研究会：ナラティブ・メディア研究会第 13 回研究会，2011 年 1 月 26 日，開催 .

2011 年度

学会：東北ドイツ文学会・第 54 回研究発表会，2011 年 10 月 29 日，事務局 .

## 1 2 専攻分野主催の研究会等活動状況

2005 年度

ドイツ文学研究室論文構想発表会・第 1 回，7 月 27 日 .

同 第 2 回，10 月 26 日 .

2006 年度

ドイツ文学研究室論文構想発表会，11 月 30 日 .

2007 年度

ドイツ語圏文化研究会・第 1 回，2007 年 4 月 18 日 .

同 第 2 回，2007 年 5 月 9 日 .

同 第 3 回，2007 年 5 月 11 日 .

同 第 4 回，2007 年 5 月 25 日 .

同 第 5 回，2007 年 6 月 8 日 .

同 第 6 回，2007 年 7 月 6 日 .

同 第 7 回，2007 年 10 月 24 日 .

同 第 8 回，2007 年 11 月 2 日 .

同 第 9 回，2007 年 11 月 9 日 .

同 第 10 回，2007 年 11 月 30 日 .

同 第 11 回，2008 年 1 月 11 日 .

同 第 12 回，2008 年 2 月 20 日 .

2008 年度

ドイツ語圏文化研究会・第13回, 2008年5月9日.

同 第14回, 2008年5月14日.

同 第15回, 2008年5月28日.

同 第16回, 2008年6月6日.

同 第17回, 2008年6月20日.

同 第18回, 2008年6月27日.

同 第19回, 2008年7月18日.

同 第20回, 2008年7月25日.

同 第21回, 2008年10月24日.

同 第22回, 2008年11月7日.

同 第23回, 2009年2月17日.

2009年度

ドイツ語圏文化研究会・第24回, 2009年5月27日.

同 第25回, 2009年6月5日.

同 第26回, 2009年6月19日.

同 第27回, 2009年7月3日.

同 第28回, 2009年7月10日.

同 第29回, 2009年7月31日.

同 第30回, 2009年10月2日.

同 第31回, 2009年10月9日.

同 第32回, 2009年10月30日.

同 第33回, 2009年11月6日.

同 第34回, 2009年11月13日.

同 第35回, 2010年1月15日.

同, 第36回, 2010年2月19日.

2010年度

ドイツ語圏文化研究会・第37回, 2010年5月21日.

同, 第38回, 2010年6月11日.

同, 第39回, 2010年6月23日.

同, 第40回, 2010年7月10日.

同, 第41回, 2010年7月16日.

同, 第42回, 2010年7月23日.

同, 第43回, 2010年10月15日.

同，第 44 回，2010 年 11 月 5 日．

同，第 45 回，2010 年 11 月 12 日．

同，第 46 回，2010 年 11 月 19 日．

同，第 47 回，2011 年 2 月 18 日．

2011 年度

ドイツ語圏文化研究会・第 48 回，2011 年 6 月 17 日．

同，第 49 回，2011 年 6 月 24 日．

同，第 50 回，2011 年 7 月 1 日．

同，第 51 回，2011 年 7 月 15 日．

同，第 52 回，2011 年 7 月 22 日．

### 1.3 組織としての研究・教育活動に関する過去 5 年間の自己点検と評価

「研究・教育活動の概要と特色」で述べたように，ドイツ文学専攻分野（以下，本研究室）は，伝統的な文学研究を核としながら，現代の状況に対応すべく，文化・思想・言語といった方面での研究・教育活動を推し進めることを目標としてきた。

この目標は，研究面においてはほぼ達成されているものと考えられる。組織とはいえ，人文学の研究は研究者個々の活動によるものである。所属スタッフはそれぞれに特徴のある研究業績をあげており，科学研究費補助金の受給件数も多い。また，定例的な研究会を主催すると同時に，当研究室は，東北ドイツ文学会（日本独文学会東北支部）の恒久的な事務局として，毎年研究発表会の企画・運営と研究誌の刊行を続けている。それ以外にも，東北大学情報科学研究科と連繋した「ナラティブ・メディア研究会」など，領域横断的な学術活動においても，本研究室の教員は企画・運営の中心として活躍している。このように専攻分野の壁を超えた積極的な研究交流に力を入れてきたことは，評価に値する成果であると思われる。

ドイツ文学分野が構造的に抱える問題として，従来，学生の少なさが挙げられていた。しかし 07 年から 10 年にかけては，修士課程への進学者と博士課程社会人研究者コースに入学する学生を得て，おおむね大学院の定員を充足する状況にあった。以下に述べる事情もあって研究指向の大学院生を得ることは困難であるが，そうした中であって，2008 年度に 1 名，2009 年度に 2 名，2010 年度に 1 名の課程博士号取得者を出したことは，特筆すべき実績である。指導の成果が現れてきた証拠と考える。2007 年度からは従来の論文構想発表会の態勢を見直し，ドイツ語圏文化研究会として新たに研究室内部での発表機会を整備した。大学院生が口頭発表の技術を磨き討議の訓練を積むことを第一目的とするが，学部生に対しても研究上のよい刺激となっている。

かつて本研究室からは多くの研究者が育っていったが、いわゆる大綱化以降、ドイツ語・ドイツ文学分野の研究職ポストが壊滅的に減少した影響を受けて、この5年間の大学等への就職実績は1名である。修士課程修了後、民間企業等に就職することも常態化しており、今後もこの傾向は続くと思われる。そのため、研究室としても、学部卒業者および修士課程修了者への就職活動の支援に力を入れ、人文学を学んだ学生を積極的に社会に送り出す態勢を整えている。数字には表れてこないが、こうした現実的対応は、目下の状況においては評価されてしかるべきものである。

学生数が少ないことは、教育指導上はメリットともなる。これも数字には表れないが、授業外の読書会・研究会や面談等を通じて、きめ細かい個別指導を行っている。ドイツ語・ドイツ文学分野で研究者になることが難しく、大学院進学のインセンティブが急激に低下している中で、この分野に関心を抱く数少ない若者をどのように育成するべきか、模索を続けている状況である。

なお学部においては、特に1年次学生に対して分野の魅力を積極的に紹介する努力を続けた結果、2005年度以降、学生数が増加している。学部学生（研究生を含む）総数は、2002年度7名であったが、2007年度・2008年度は27名と激増し、2009・2010年度には30名と定員の上限に至った。授業でも、文学研究という核を重視しつつ、多様なニーズに応える工夫を重ねており、そうしたことが、学生の間で一定の評価を受けているものと推察される。

厳しい状況の中で、分野の存続・発展の方向性を模索しながら本研究室が行ってきたこの5年間の研究・教育両面における努力とその成果は、おおむね評価に値すると考えるものである。

## 教員の研究活動（2007～2011年度）

### 1 教員による論文発表等

#### 1-1 論文

HARA, Kenji, “Die essayistische Konzeption der *Cultur der Renaissance in Italien*: Deutungen aus dem Vergleich der Marginalien mit der Inhaltsübersicht.” In: *Unerschöpflichkeit der Quellen. Burckhardt neu ediert – Burckhardt neu entdeckt*. Hrsg. von Urs Breitenstein, Andreas Cesana, Martin Hug. Basel (Schwabe AG) 2007.

森本浩一「新旧論争と17世紀の「言語」観」、『「新旧論争」に顧みる進歩史観の意義と限界、並びにそれに代わり得る歴史モデルの研究』（平成18-19年度科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果報告書、代表者：栗原隆）、1-20

頁，2008年3月。

森本浩一「表現によって現れ出るもの」，『コミック研究のフレーム再考のために——研究方法の多様化と今後の展望——』（ナラティブ・メディア研究会第1回ワークショップ報告書，編集代表者：森田直子），ナラティブ・メディア研究会，61-67頁，2008年3月。

森本浩一「物語認知の比較ジャンル論的考察 物語的他者への自己移入という観点から」，『ナラティブ・メディア研究会活動報告書 2008年度』，ナラティブ・メディア研究会，121-145頁，2009年3月。

森本浩一「イメージと物語 T・グルンステンの著作を手がかりに」，『ナラティブ・メディア研究』第2号，ナラティブ・メディア研究会，127-140頁，2010年8月。

森本浩一「メタ表象としての虚構」，『文学における不在 原研二先生記念論文集』，東北大学ドイツ文学研究室刊，2011年10月。

Schmitz, Brigitte, “Thomas Manns Sicht auf Hitler in Verbindung mit Manns Verhältnis zum Judentum (Teil II).” 『東北大学文学研究科研究年報』57号，東北大学文学研究科，30-48頁，2008年3月。

Schmitz, Brigitte, “Erscheinungsformen des “Dämonischen” im Werk von Thomas Mann – vornehmlich dargestellt am Beispiel des *Doktor Faustus* –.” In: Neue Beiträge zur Germanistik, Band 7 / Heft 2, 2008. Japanische Ausgabe von “DOITSU BUNGA KU”. Herausgegeben von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik (JGG). Sonderthema: Das Dämonische. S. 40-61.

Schmitz, Brigitte, “Die Spuren Jacob Burckhardts in Thomas Manns Werk – vornehmlich in seinem Renaissancedrama *Fiorenza*.” In: *Unerschöpflichkeit der Quellen. Burckhardt neu ediert – Burckhardt neu entdeckt*. Herausgegeben von Urs Breitenstein, Andreas Cesana, Martin Hug. Basel (Schwabe AG), S.235-249, 2007. (Beiträge zu Jacob Burckhardt. Herausgegeben von der Jacob-Burckhardt-Stiftung, Basel; Band 7)

Schmitz, Brigitte, “Thomas Manns Sicht auf Hitler in Verbindung mit Manns Verhältnis zum Judentum (Teil III).” 『東北大学文学研究科研究年報』58号，東北大学文学研究科，2009年3月。

Schmitz, Brigitte, “Gedanken zum Lebensinteresse angesichts des Todes in Werken Thomas Manns und im weiteren geistesgeschichtlichen Kontext mit Blick auf die Thematik der *Ars moriendi* (Teil I).” 『東北大学文学研究科研究年報』60号，東

北大学文学研究科，2011年3月。

Schmitz, Brigitte, “Der Tod als ein Phänomen des Anwesend-Abwesenden – Betrachtungen zur Todesthematik im Werk von Thomas Mann–.” 『文学における不在 原研二先生記念論文集』，東北大学ドイツ文学研究室刊，2011年10月。

嶋崎啓「中高ドイツ語『イーウェイン』における他・再帰動詞と他・自動詞」，『東北ドイツ文学研究』51号，東北ドイツ文学会，123-145頁，2008年7月。

嶋崎啓「脱神話化の物語としての『ニーベルンゲンの歌』」，『文学における不在 原研二先生記念論文集』，東北大学ドイツ文学研究室刊，2011年10月。

## 1-2 著書・編著

岩田美喜・竹内拓史編『ポストコロニアル批評の諸相』，東北大学出版会，2008年。

川村和宏『ミヒャエル・エンデの貨幣観 ゲーテの『メルヒェン』からシュタイナーを経た錬金術思想の系譜』，三恵社，2011年。

## 1-3 翻訳、書評、解説、辞典項目等

原研二『地球時代を生きる感性』，アンドレーアス・チェザーナ著（沼田裕之・遠藤千晶・中澤武・別所良美・山崎高哉と共訳），東信堂，2007年。

Schmitz, Brigitte, “Beitrag über Leben und Werk des Germanisten Kenji Hara, Universität Tohoku – aus Anlass seines Todes im Jahre 2008 –.” In: *Sammelband der Internationalen Charles-Sealsfield-Gesellschaft*, Wien, 2010.

嶋崎啓「ドイツ語の史的研究・はじめに」（解説），『東北ドイツ文学研究』51，東北ドイツ文学会，83-86頁，2008年7月。

嶋崎啓「根本道也『ドイツの標準語 その生い立ちと辞典の個性』」（書評），『九州ドイツ文学』22号，九州独文学会，57-59頁，2008年11月。

## 1-4 口頭発表

Schmitz, Brigitte, “Ästhetik der Dinge” Arbeitsgruppe 3A (Arbeitstext: W. G. Sebald: *Austerlitz*), 日本独文学会・第52回蓼科ゼミナール，部会主宰，2010年3月。

嶋崎啓「ゲルマン祖語から西・北・東ゲルマン語への変化」，日本独文学会 2010年秋季研究発表会シンポジウム「ゲルマン祖語から現代ドイツ語へ 歴史的

- 発展における駆流とその反動」, パネル, 2010年10月10日.
- 竹内拓史「G・ビューヒナーの自然科学研究と文学 『レンツ』の場合」, 第3回ドイツ語圏文化研究会, 口頭発表, 2007年5月.
- 竹内拓史「「クラールスの鑑定書」と「シュモリング鑑定書」について その訳出上の問題点を中心に」, 日本ゲオルク・ビューヒナー協会第9回研究発表会, 口頭発表, 2007年6月.
- 竹内拓史「ヴォイツェク裁判について クラールス鑑定書の解題との関係で」, 日本ゲオルク・ビューヒナー協会2007年度秋期研究発表会, 口頭発表, 2007年10月.
- 川村和宏「「メルヒェン」の射程 モチーフ・プロット・再話の潜在性」, 第37回ドイツ語圏文化研究会, 口頭発表, 2010年5月21日.
- 川村和宏「携帯電話用Flashプログラムによる初学者向けドイツ語学習ソフトウェア開発」, 東北ドイツ文学会第53回研究発表会, 口頭発表, 2010年11月6日.
- 川村和宏「『はてしない物語』とゲーテの錬金術モチーフについて」, 第48回ドイツ語圏文化研究会, 2011年6月17日.
- 川村和宏「携帯電話用ドイツ語学習ソフトウェア開発と授業における実践」, 日本独文学会2011年度秋季研究発表会, 口頭発表, 2011年10月15日.

## 2 教員の受賞歴(2007~2011年度)

- 原研二: 第三回オーストリア文学研究会賞(著書『物語と不在』に対して), オーストリア文学研究会, 2007年.

### 教員による競争的資金獲得(2007~2011年度)

#### (1) 科学研究費補助金

2007年度

原研二(研究代表者): 基盤研究(C)「19世紀のドイツ語の歴史記述と物語記述の比較分析研究」, 1,950,000円

森本浩一(研究代表者): 基盤研究(C)「虚構における物語認知の比較ジャンル論的研究」, 1,040,000円

森本浩一(研究分担者): 基盤研究(B)「『新旧論争』に顧みる進歩史観の意義と限界, ならびにそれに代わり得る歴史モデルの研究」, 555,000円

Schmitz, Brigitte(研究分担者): 基盤研究(C)「19世紀のドイツ語の歴史記述



と物語記述の比較分析研究」, 593,600 円

#### 2008 年度

原研二(研究代表者): 基盤研究(C)「19世紀のドイツ語の歴史記述と物語記述の比較分析研究」

森本浩一(研究代表者): 基盤研究(C)「虚構における物語認知の比較ジャンル論的研究」, 780,000 円

Schmitz, Brigitte(研究分担者): 基盤研究(C)「19世紀のドイツ語の歴史記述と物語記述の比較分析研究」, 649,788 円

嶋崎啓(研究代表者): 基盤研究(C)「ドイツ語における文法化現象の実証」, 1,300,000 円

#### 2009 年度

Schmitz, Brigitte(研究代表者): 基盤研究(C)「19世紀のドイツ語の歴史記述と物語記述の比較分析研究」, 1,170,000 円

嶋崎啓(研究代表者): 基盤研究(C)「ドイツ語における文法化現象の実証」, 1,170,000 円

#### 2010 年度

森本浩一(研究代表者): 基盤研究(C)「物語フレームと人物造形の関連に関する比較ジャンル論的研究」, 1,950,000 円

嶋崎啓(研究代表者): 基盤研究(C)「ドイツ語における文法化現象の実証」, 1,170,000 円

#### 2011 年度

森本浩一(研究代表者): 基盤研究(C)「物語フレームと人物造形の関連に関する比較ジャンル論的研究」, 1,170,000 円

嶋崎啓(研究代表者): 基盤研究(C)「ゲルマン語における文法範疇の発展パターンと個別性」, 1,170,000 円

嶋崎啓(研究分担者): 基盤研究(C)「ファシズムとの関連におけるA.ボイムラーの思想に見られるドイツ的特質の研究」, 175,000 円

## (2) その他

#### 2007 年度

竹内拓史(研究分担者): 東北大学萌芽研究育成プログラム ポストコロナルテクストのアイデンティティ表象比較文化史的研究 2,000,000 円(2005~2007年度全体額)

### 教員による社会貢献（2007～2011年度）

原研二, Schmitz, Brigitte: 校訂版『ブルクハルト全集（イタリア・ルネサンスの文化）』の編集, J. Burckhardt: *Die Cultur der Renaissance in Italien*, JBW [Jacob Burckhardt Werke, Kritische Gesamtausgabe, 27 Bände, Bd. 4, München (C. H. Beck) / Basel (Schwabe AG) 2000 ff.], 2011年度継続中.

森本浩一: 平成19年度第1回仙台電波高等専門学校専攻特別講義（第143回定例談話会）「メタファーを考える」, 講師, 仙台電波高専, 2007年5月18日.

森本浩一: 第10期有備館講座・第3回「「虚構」としての人間」, 講師, 大崎市スコレハウス, 2010年7月17日.

森本浩一: 平成23年度みやぎ県民大学・第1回「説得と欺瞞のはざま <レトリック>から人間を考える」, 講師, 東北大学文学部, 2011年9月12日.

嶋崎啓: 武蔵台高等学校キャンパスセミナー講演, 講師, 福岡県立武蔵台高校, 2006年7月31日

嶋崎啓: 第2期斎理蔵の講座「私の見たドイツ」, 講師, 丸森町民センター, 2009年7月4日.

竹内拓史: 利府高等学校講演会「ドイツの現代事情について」, 講師, 宮城県立利府高校, 2006年11月1日.

### 教員による学会役員等の引き受け状況（2007～2011年度）

森本浩一

東北ドイツ文学会委員, 『東北ドイツ文学研究』編集委員（2007～2011年度）

日本独文学会東北支部長（2008～2011年度）

東北ドイツ文学会会長（2008～2011年度）

Schmitz, Brigitte

東北ドイツ文学会『東北ドイツ文学研究』ドイツ語校訂（2007～2011年度）

嶋崎啓

東北ドイツ文学会委員, 『東北ドイツ文学研究』編集委員（2007～2011年度）

日本独文学会語学ゼミナール実行委員（2007～2009年度）

日本独文学会編集委員（2009～2011年度）

ドイツ語学文学振興会ドイツ語技能検定試験会場責任者（2009～2011年度）

竹内拓史

東北ドイツ文学会事務局（2007～2008年度）

日本ゲオルク・ビューヒナー協会編集委員（2007年）

日本ゲオルク・ビューヒナー協会事務局長（2008年）

川村和宏

東北ドイツ文学会事務局（2010～2011年度）

## 教員の教育活動

### （1）学内授業担当（2011年度）

#### 1 大学院授業担当

森本浩一

ドイツ文学研究演習Ⅰ，

シュミッツ，ブリギッテ

ドイツ文学研究演習Ⅱ，

嶋崎啓

ドイツ文化学特論Ⅰ，

ドイツ文化学研究演習Ⅰ，Ⅱ

#### 2 学部授業担当

森本浩一

人文社会科学総論

ドイツ文学概論Ⅰ，

ドイツ文学演習Ⅰ，

ドイツ語学演習Ⅰ，

シュミッツ，ブリギッテ

ドイツ文学基礎講読Ⅰ，

ドイツ文学演習Ⅱ，

ドイツ語学演習Ⅱ，

嶋崎啓

ドイツ語学概論Ⅰ，

ドイツ語学各論

川村和宏

ドイツ語学基礎講読Ⅰ

#### 3 共通科目・全学科目授業担当

森本浩一

専門ドイツ語

嶋崎啓

基礎ドイツ語 I,

シュミッツ, プリギッテ

基礎ドイツ語 I, II

川村和宏

専門ドイツ語

## (2) 他大学への出講 (2007 ~ 2011 年度)

森本浩一

青山学院大学 (2008 ~ 2009 年度)

放送大学福島学習センター (2009 年度)

嶋崎啓

山形大学 (2011 年度)

九州大学 (2011 年度)